イラン民俗学研究最前線

海外交流

竹　原　　新*

From the Forefront of Iranian Folklore Studies

Key Words：Iranian folklore, Persian language, Field research

はじめに

イランの怪談の中から１話、あらすじを紹介する。

猫好きのお爺さんの前に、１匹の猫が現れた。綺麗なかわいい猫であった。お爺さんが猫を追いかけると、猫は逃げた。やがて、猫は井戸に逃げ込んだ。横穴のある井戸であった。猫は井戸の横穴を進み、縦穴を１つ過ぎ、２つ過ぎ、３つ過ぎたが、お爺さんはまだ追いかけてくるではないか。４つ目の縦穴を過ぎたところで、とうとう猫はお爺さんに『しつこい奴だな！まだ追ってきやがる』と言った。それで、お爺さんはそれが猫でないことがわかった。ジン（妖怪）だったのだ。その後、お爺さんは二度と猫を追いかけることはなかったということである。

大阪大学外国語学部で筆者が担当するペルシア語実習の授業で、眠気覚ましにイランのお話を語ることがある。上の話の場合、「しつこい奴だな！」という猫のセリフを、教卓の両端を掴んでガタガタッと揺さぶりながら大声で叫んで驚かすのがコツである。

筆者の専門はイラン民俗学である。研究対象はペルシア語で語られるイランの昔話、伝説、俗信などであり、怪談も含まれる。上で紹介した怪談もイランでフィールド調査により採録した話の１つである。

* Shin TAKEHARA
1971年5月生まれ
大阪外国語大学大学院言語社会研究科言語社会専攻博士後期課程修了（2000年）
現在、大阪大学　大学院言語文化研究科言語社会専攻　准教授
博士（言語文化学）　イラン民俗学
TEL：072-730-5307
FAX：072-730-5307
E-mail：takehara@lang.osaka-u.ac.jp

フィールド調査と時間軸

かれこれ20年間程イランでフィールド調査を続けてきて、最近、少しは思うことも出てきた。大学院生の頃は、下手でもとにかくペルシア語でフィールド調査ができるようになったことが嬉しくて、イラン国内のあちこちに行っては、手当たり次第に採録したものである。たまたま出会った人や目が合っただけの人からも語ってもらい、また、その人たちから昔話を知ってそうな人を紹介してもらう、というように、芋づる式に話者数と採録数を増やしていったものである。もちろん、イランの人々の大らかで社交的な国民性に助けられたのは言うまでもない。

しかし、年が経つにつれ、資料数だけではなく、時間の経過そのものに民俗学的な価値があると考えるようになってきた。例えば、この20年間、テヘラン南方の農業地帯のある地区をよく訪れている。かつては小さな農村であったが、最近は人口が増え、村から町になりつつある地区である。このところ、イランにフィールド調査に行けるのは、大学での授業がない夏休み中の2、3週間程で、その地区を訪れるのはその間の数日しかない。訪問しない年もあった。それでも、長年、定点での調査を続けていると、人々の顔や名前だけでなく、性格や人間関係もわかるようになってくる。

若い世代の人たちは結婚し、子どもが生まれて育っていくし、子どもは大人になり、お年寄りは亡くなる。この地区に流れる時間の経過に応じた変化が見えてくる。やがて、一見さんには見せない一面を見せてくれるようにもなってくる。決まった時期にやって来る外国人の筆者が、地区の人々にとって非日常の存在から、ふとしたはずみで日常の一部にな

る瞬間を感じることもある。

この地区では、語りができる人を見つけては、片っ端から録音させてもらったので、筆者が「昔話が語れる方を他にも紹介してほしい。」と言っても、「もう、この辺りの昔話を全部録音したじゃないか。」というようなことを言われもした。

調査に際しては、昔話などの音声だけでなく、話者の顔写真も撮っている。話者が亡くなった際には、調査で採録した生前の写真や肉声のデータをご遺族にお渡しするということもあった。

もちろん、最初はこんなに長い間、その地区の人々にお世話になるとは思っておらず、決して、彼らとの長期交流を計画して始めたことではない。しかし、結果的に、以前は気づかなかった時間軸という要素が加わったことで、いわば次元が一つ加わった形でイラン民俗を理解できるようになってきた。

フィールド調査とテープ起こし

民俗学者のフィールド調査は、ともすると、旅行ついでのお気楽なものと思われがちである。また、現場の調査そのものに着目されがちである。しかし、実際は、調査にかける時間より、事前の仕込みと事後の整理にかける時間の方が圧倒的に多く、中でも事後のテープ起こしにかける時間は、現場の調査にかける時間の何十倍もあるように思う。

録音した音声を文字に起こすテープ起こしの作業は一種の技術である。もちろん、現在はテープなどは使っておらず、録音にはICレコーダを使い、文字に起こす作業はパソコンで行う。しかし、脳内の作業は今も昔と変わらない。

筆者が行う文字化の作業は、いわゆる素起こしという文字の起こし方で、いい間違えや筋が通らない言葉もすべてそのまま文字化する方法である。テープ起こしの正確さがその後の研究の質を左右するので、この作業は最も気を使うプロセスとなる。普段は大ざっぱでいい加減な筆者も、テープ起こしの作業だけは細心の注意とともに取り組んでいる。

筆者の場合、起こす音声はペルシア語であり、文字はアラビア文字となる。特に、お年寄りに地方の方言で話されると、テープ起こしは辛く過酷な作業となる。恥ずかしながら、現場での録音の最中は、話の詳細まではわかっていないことも少なくない。そんなときは、頷く。わかっていないのに、わかっているふりをして真面目な顔をして頷いたり、相槌を打ったりして、語りの継続を促すのも採録技術の一つなのである。

そして、採録後は、現場の記憶が残っているうちに、必ず自分で文字に起こす作業をする。この作業は、調査日以降、早ければ早いほど良い。日数が経過すると、録音前後の話者との会話、現場の匂い、温度、雰囲気などを忘れてしまい、それらの情報を資料の行間に反映できないのである。まるで職人のようなことを書いているが、実際、フィールド調査には、録音前後の作業も含め、技術だけでなく、それなりの感覚が求められる。また、私のような横着者にとっては、正確さが求められるこの一連の作業は、まさに自分との戦いとなる。

音声データを何度も何度も聞いていると、話者の話し方や発音の特徴、口癖などがわかってくる。現場では不本意ながら頷くことしかできなかったようなヘビイな方言も、やがて徐々にわかるようになってくる。筆者にとってはここがアートであり、フィールド調査のモチベーションの一つなのであるが、今は横へ置いておこう。とはいえ、文字や語義が100％わかる事例の方が少ないので、ネイティブチェックは必須となる。それでもわからない場合は、もう一度話者に会いに行って尋ねることもある。

冒頭の話はありふれた怪談の事例であるが、こういった作業を経た上で日本語訳し、さらに、あらすじにしたもので、殊の外、手がかかったものなのである。

外部から訪れる調査者として

ある土地に毎年のように顔を出していたとしても、或いは、現地の方言がわかるようになったとしても、筆者のような外国人の調査者は、その土地の人々にとってはただの来訪者にすぎない。来訪者に対する土地の人々の扱いは、吉をもたらす客人になるか、反対に、厄をもたらす疫病神になるかのどちらかになりがちであるということは、民俗学者の一人としてわかっているつもりである。

幸い、イランでは基本的に客人を吉と捉える傾向があるため、特に農村部では、外国人が珍しいこともあってか、大概、筆者は客人として扱ってもらえた。上述の地区においても、このまま私が毎年同じ時期に訪れる客人としての振る舞いを続けている限

り、客人で居続けられるのではないかと思う。しかし、もう一歩、彼らの生活に深く踏み込んで、ある一線を超えてしまった場合、つまり、筆者自身が「非日常ゆえの異質な存在」から「日常の中の異質な存在」になってしまった場合、一転して凶たる疫病神に転落するかもしれないのである。もちろん、ただの来訪者が日常の存在になれるはずはないのではあるが、上で述べたように何かの拍子にその兆しを感じることがある。来訪者には来訪者なりの振る舞い方があるのだ。

おわりに

ところで、冒頭の怪談を筆者が授業で語った回数はかなりのものである。もはや、持ちネタと化している。もちろん、学生が同じ顔ぶれの授業では同じ話は1度しかできない。しかし、採録話数が増えるにつれ、語れる話のレパートリーも増えてきて、それほどネタ切れを心配する必要はなくなってきた。普段、そんなに眠たい授業ばかりをやっているのかと言われそうであるが、この頃、語るのが楽しくなってきた。眠気を覚ますために語るのか、語るために眠たい授業をするのか。長いこと、筆者は語りの聞き手のつもりでいたが、案外、語り手の方が向いている気もしてきた。

ミイラ取りがミイラになるとはこういうことを言うのかもしれない。